

本科 1 期 4 月度

解答

乙会東大進学教室

早大国語



1章

【問題】(演習)

出典：山崎正和『近代の擁護』／法政大学 社会学部 99年

文章略解

近代に入って、人々は村や家系の関係から離れ、都市に居住し、契約によって他人と結ばれるようになった。こうして生まれた近代的自我は人間中心主義の支えとなったが、一方で永続する生命の鎖から切り離されることへの不安をも生んだ。そうした不安は、これにかわる永続的な生命の象徴を求める方向に向かった。自然は、個体を超えた生命の実感を持ち、しかも近代的自我と矛盾しないため、近代人に愛されるようになったのである。

解答

問1 1 II ア 2 II イ 3 II イ 4 II イ 5 II イ 6 II ア 7 II ア 8 II ア

問2 5

問3 2 問4 5

問5 人間中心主義は村や家系の関係から離れた自我を前提としたため、一方で永続する生命の鎖から切り離される不安も生んだ。それゆえこれに代わる永続する生命の象徴として近代人は自然を求めるようになったということ。(100字・解答例)

出典：竹内好『中国の近代と日本の近代』／上智大学 法学部 98年

文章略解

ヨーロッパが、その生産様式・社会制度・人間の意識を東洋に持ちこんだ背景には「近代」精神の本質である自己解放ということがある。ヨーロッパの自己解放は、異質なものにぶつかることによってたえず更新・確認されるという性質を帯びていたため、東洋へ進入し、抵抗を受ける過程でさらに強固なものになっていった。そして十九世紀の後半になると、このヨーロッパの内部矛盾が東洋を媒介として露見することとなり、分裂に至った。

解答

問1 d 問2 a

問3 b 問4 d

問5 a 問6 ア⇐A イ⇐A ウ⇐B エ⇐B オ⇐B

解説

問1 問題文の中で、「近代」を主語とし、その「本質」について述べた部分を探していくことから解答の手がかりが得られる。傍線部分に続く文に、「近代とは……封建的なものから区別された自己を自己として、歴史において眺めた自己認識である」(7～9行目)とあるところに注目。ここの内容を押さえれば、選択肢群の中でdを選ぶことは困難ではあるまい。aに言う「自由な資本」とは「生産面」について述べた部分(7行目)にあり、「近代」そのものの本質というには不十分。bの「投機的な冒険心」については「よくわからぬ」(5行目)とされており、そもそもこれは「近代」の本質として問題文中に述べられているものではない。

cの「疑う我を疑いえない」というのは「近代精神の根本の命題のひとつ」(14行目)とされているが、「近代」そのものの本質と直接には言い切られていない点でdには劣る。

問2

傍線部分が「空虚な時間の形式ではない」、と言っているのだから、裏を返せばこの「時間」には内実が伴っていたということになる。その「時間の内実」については、傍線部分に続く記述の中で「自己を自己たらしめる、そのためその困難と戦う、無限の瞬間」(11行目)と述べられている。この内容をふまえた上で選択肢群を見ていけば、aを選ぶことができよう。bでは「無限の瞬間」の内容が説明不足である点でaに劣り、また「東洋へ侵入するため」という文言にも問題がある(最初からそれが目的だったわけではない)。cの「封建的なものを否定するため」というのも的外れ。「封建的な時間」を否定して「自己を確立する」ことこそが近代なのである。その点で説明不足。dにおいても「自由な資本を発生させるため」の部分に難あり。この「自由な資本」云々は問1の選択肢aと同じく、「封建的なものから自己を解放する過程」の「生産面」についてのことであり、これだけでは不十分。

結局のところ、問1も問2もキーワードは「自己」であった。

問3

傍線部にある「不断の自己更新の緊張」に関しては、続く段落中に述べられているところが手がかりになる。「かれらは不断の緊張によって自己であろうとする。たえず自己であろうとする動きは、たんに自己に止ることを不可能にする。自己が自己であるためには、自己を失う危険も冒さなければならぬ」(19～20行目)という記述の趣旨に照らせば、ここにいる「緊張」とは、自己のアイデンティティの危機をも含めて、自己更新・自己拡張を図っていくことの意味に取れよう。だとすればその趣旨に合っている選択肢としてはbがベスト。aの「自己を失わないようにする」ではこれと正反対。cの「閉鎖的な殻の中へ押し込められないようにする」やdの「自己を再生産してゆく」ではいずれも的はずれ。ここでは傍線部分の類似表現を探っていくことから解答の糸口が得られるわけだ。

問4

前問の「不断の緊張」＝「自己に止まらない(自己拡張)」という趣旨がきちんと押さえられていれば、その延長線上にあるdを選ぶことができる。この傍線部分の直後に「それはヨーロッパの自己解放に伴う必然の運命であった」↓「異質なものにぶつか

ることで逆に自己が確かめられた」(26行目)とあるところに照らして考えてみても、この「異質なもの」としての「東洋」に出ていくのは自己を解放・拡張しながら確かめていく上で必然であったことが読みとれよう。bの「自己保存」ではこれとは逆。cの「危険を冒す」だけではその「危険」の内容が説明不足。この選択肢は間違いではないがdには劣る。aの「閉鎖的な殻を破らねば」云々についてもやはり説明不足。それが「異質なもの」＝「東洋」との接触を契機とするものであることの説明がない以上、この選択肢群の中でこれを「最も適切なもの」と判断するのは妥当でない。

問5 選択肢それぞれの末尾が「○○が……すること」という形で揃っていることに注目。とどのつまりこの設問で出題者が問うているのは、傍線部分に言う「世界史をいつそう完全なものにする」という部分の具体的な意味はどういうことか、ということにつきるわけだ。そのことを押さえた上で傍線部分に関連する記述を検討していこう。

傍線部分に言う「東洋の抵抗」については、この前の部分により詳しい形で述べられている。「ヨーロッパの東洋への侵入は、東洋において抵抗を生み……それさえも、……徹底した合理主義の信念を動かすことはできなかった」(36～38行目)という記述に照らせば、ヨーロッパが東洋に侵入したことの結果は「合理主義の徹底」であることがわかる。これは、さらに前の段落における「ヨーロッパにとって」の「世界史の進歩」(29行目)が「合理主義精神の進歩」(31行目)＝「よりよき完全への無限の近づきを目指す向上心、それを裏づける実証主義と経験論と理想主義、ものを等質において量的に見る科学」(31～33行目)の生成であると述べられていることにも付合する。こうしたニュアンスを踏まえれば、選択肢群の中で最適なもの「合理主義が完成すること」としているaであると判断できよう。bについては、「理性の勝利」という捉え方自体は誤りではないが、aに比べるとやや劣る。また、aに言うような「自己を明確にし」云々の記述がない点でもaに劣る。cの「ヨーロッパが世界を包括する」やdの「多様な世界が成立する」はいずれも的はずれ。

問6 それぞれの選択肢を問題文と照合しながら判断していけばよい。アについては、問4で検討したように、ヨーロッパの東洋侵入が、「異質なもの」に触れることによって逆に自己を確認する手だてであった、という趣旨に合致している。イについては、「高次の文化の低次の文化への流入」という表現は問題文中に登場している(34行目)が、これが前段落に言う「ヨーロッパの自己実現」＝「合理主義精神の進歩」(問5の解説参照)に相当するものであることが読みとれば、ヨーロッパにとっての自明のことであ

ると判断できよう。したがってこれも趣旨には合致している。ウについては、「進歩を導き出した矛盾が、同時に進歩をさまたげる矛盾でもある」という記述（44行目）は問題文中にあるが、選択肢後半に相当する記述は問題文中にない。そもそも「ヨーロッパが東洋を包括しきれなかった」とは述べられていない（「東洋を包括したことで世界史は完成に近づいた」という記述が42〜43行目にあり、これと相反するニュアンスである）し、ましてや因果関係に相当する記述はない。エも同様に因果関係に相当する記述が問題文中にない点で不適切。「ロシアにおける抵抗」（48行目）が「ヨーロッパの分裂」（45行目）に乗じて成し遂げられたのではなく、あくまでも結果としてはじき出される形で起こった（47行目）ものである。オの「清教徒的な開拓精神」（4行目）については、選択肢のような因果関係は見られず、これも趣旨に合っているとは言い難い。

●
×
モ
●

【問題】(演習)

出典：北沢方邦『近代科学の終焉』〈危険な道〉／成城大学 経済学部 02年

文章略解

近代科学の正統派にとって、近年の科学は「危険な道」を歩みつつある。それは近年の科学が人間の日常的経験の枠を超え、現世のみを対象とする近代固有のリアリティ感覚を脅かしはじめたからである。近代芸術においては、現世の諸影像を忠実に再現するリアリズムが支配的となり、そのリアリズムを解体する動きが二十世紀以降に生じた。最先端の科学からも神話的な響きが聞こえてきた今、正統派は「科学の終焉」を説きはじめていたのである。

解答

問1 (ア)〓しゅうえん (イ)〓いんうつ (ウ)〓いきよ

問2 ニ 問3 ニ 問4 A〓ニ B〓ハ 問5 現世に重ね〓リアリティ〔20字・34〓35行目〕

問6 近代固有のリアリティ概念や感覚〔15字・38行目〕 問7 世俗化〔39行目〕

問8 現世に存在〓、構成する〔22字・45行目〕 問9 現世的な感情〔51行目〕

出典：白井吉見『言葉の復讐』／上智大学 文学部 98年

文章略解

本来、言葉というものは人間の肉体の深いパトス(情感)に根ざし、その上で高く広いロゴス(客観性・理性)を持つものである。ところが「八紘一字」「皇軍」「一億総懺悔」など、いわゆる非常時以降に国家が作り国民に強制した言葉は、人間の肉体を通過したもではなく、言葉から生み出されたものであった。こうして言葉は人間から離れ、その言葉と人間とが相互に汚し合うという状況が生まれた。これは言葉の人間への復讐である。

解答

問1 c

問2 a

問3 ア||B

イ||B

ウ||A

エ||A

問4

b

問5 d

問6

c

問7 ア||B

イ||A

ウ||A

エ||B

オ||B

問1 傍線部の直前に「肉体の深くて狭いパトスを宿しながら、高く広いロゴスたりうる」(8～9行目)とあるところに注目。ここで筆者の言う「言葉」とは「肉体」に関わるもの、という含意を持っている。

選択肢群の中で「肉体」という語を含んでいるのはcとd。ただしdは「肉体から独立して……」とあることから、「肉体」とは異なるものであるという意味になっている。したがってベストなものはc。

問2 ここで筆者の言う「言葉の真実」とは、「肉体」を通過するものであること、言い換えれば「生活そのもの」に根ざすものであることを意味している。だとすれば、「牛を追う」という言葉の「真実」とは、「牛」というものを農民たちが自分の「肉体」によって直に見て、直に扱う、という「生活」そのもののなかで育まれた……というところに求められよう。このニュアンスを最もよく表している選択肢はaの「牛の実体をとらえている」。bの「風格を表現している」では少々外れる。cの「言葉が言葉になる消息」は外れてはいないが、aに比べれば具体性が乏しい(設問の指示に「具体的にどういうことか」とある点に注意)。dの「客観的なあり方」云々は、二段落後の記述にある「客観的なもの」とならざるをえない(34行目)を踏まえたものではあるが、この部分の主旨としてはその「客観的」であることだけが「言葉の真実」だというのではなく、「客観的なものたる言葉はつねに肉体にかえり、肉体を通して流通する」(34～35行目)ということ、つまりは往還運動をなすところにその「命の涸渇から救われ」る可能性があるので、ということである。したがってこの選択肢の文言だけでは不十分。

問3 「肉体を通過した」「生活に根ざした」言葉に代わって、「言葉からすべてが生み出され」る状態を指して傍線部では「第二の言葉」と述べているわけだ。したがって、「体験の積み重ね」に根ざすとしているアや、「肉体的性と客観性との間を往復する」としているイは、その「第二の言葉」以前の言葉を指すものと捉えられる(したがってこれらはいずれもB)。ウの「国家が言葉の生れるべき母胎を無視して」というのは、この傍線部に先立つ記述に「言葉は国家がつくり、その流通を国民に強制した。言葉は生るべき母胎から生れることを禁ぜられ……」(36～38行目)とあるところに一致しており、まさにこの「第二の言葉」に相当している。そしてその「生るべき母胎」イコール人間の生活から遊離した「第二の言葉」は、「人間にむかって復讐する」(1行目)可能性を持つものである。したがってウ・エはいずれもA。

問4 問3で言うところの「第二の言葉」がここで言う「肉体を失った言葉」に相当している。したがって、dに言う「智慧から生まれた」というのはこれとは相反している。これは、人間の肉体に根ざした、元来の「言葉の真実」に連なるものである。aに言う「ロゴス」というのも、この「言葉の真実」の一面を言い表したものである。問1で検討した「肉体の深く狭いパトスを宿しながら、高く広いロゴスたりうる」(8～9行目)という記述に今一度注目されたい。したがってこの選択肢も「肉体を失った言葉」とイコールではない。b・cの内容はいずれもこの傍線部を含む段落中に出てくるが、「それは最初から肉体を離れた数学や化学方程式におけるような明晰清潔なものではなくて、無智と野蠻の人間臭にべとべとにまみれていた」(49～50行目)という記述に照らせば、cではなくてbだと判断できよう。

問5 傍線部に続く記述の中に、この表現の意図が述べられている。「我々の場合は……ただバケツリレーのように手渡されたものを手渡してやるだけのものだった」(57～59行目)という記述は、問3で検討したところの「肉体から、ものから、言葉が生れることを止めて、言葉からすべてが生み出され」(40～41行目)る、ということに相当している。つまり、ここで筆者が指摘している「第二の言葉」＝「肉体を失った言葉」しか日本人は持っていなかったため、「ヴァレリーの言葉への不信」などが成立する前提があり得ず、したがって「贅沢な嘆き」(57行目)だと言うのである。

こうした主旨を踏まえた上で選択肢を見ていけば、dの「言葉の意義を、肉体を通した生活の中で使用することがない」とする内容がまさにこれを言い当てていることがわかる。aに言うように「明晰なもの」であるということが問題なのではない(だからこの選択肢は的外れ)。bに言う「意義を手さぐりする」ことがなかったのが問題なのだ(したがってこの選択肢も的外れ)。cは近いが、なにゆえに「極北と認知されていなかった」のかが説明不足。その点を言い当てているのがdである。

問6 「復讐」について述べられているのは問題文冒頭の段落。ここでは、「言葉と人間とが相互に汚し合い、傷つけ合う陰惨奇怪な地獄図」(1～2行目)とされている。ここを踏まえた選択肢……というふうを探していけば、cの選択肢がまさにこの事情を言い当てていることがわかる。aに言う「ひとり歩き」だけでは「復讐」の説明としては不十分。dに言う「ヴァレリーの言う理想的な言葉のあり方」というのも的外れ。bの前半に言う「肉体を通して流通」するのは「言葉の真実」であり、それは「パトスとロゴスの不思議な統一の上に成り立つ」(8行目)ものである。だとすればこの選択肢の前半と後半とは矛盾していることになって

しまつ。

問7

ここまでで検討してきたように、筆者の考える「言葉の真実」とは、「肉体」を通過するもの、ということである。その例として「子供」や「少年航空兵」などが挙げられているわけだから、イはそうした主旨に合っているものと判断できる。そして、「客観性」を帯びざるを得ない言葉が「肉体にかえり、肉体を通して流通することによって、命の涸渇から救われ」(34～35行目)と、とする記述に照らせば、ウもこうした主旨には合っている(したがってこの二つはA)。対して、「非人間的な言葉」が「肉体性を帯びたものになる」としているエはこの二つとは反対の主旨である(したがってこれはB)。

アとオの選択肢を吟味する際に注意すべきは「因果関係」を示す語である。アで言うなら「子供を排除する」ことが「第二の言葉を生み出すことができた」ことの原因なのか否か、オで言うならば「明晰さ」が「流通可能となった」ことの原因なのか否か、の吟味である。これらの因果関係は問題文中には述べられていない。したがって、これら二つの選択肢はいずれもBと判断できる。

【問題】(演習)

出典：福田恆存『日本を思ふ』／早稲田大学 法学部 99年

文章略解

「私」は西欧思想の根本に多くの人の理解とは異なる絶対主義があると捉えている。その絶対主義とは、現実平面の上の一点に絶対者の存在がある、という意味である。そのことで西欧の人々は、立体的に世界を捉え、その絶対者を媒介として全ての他者をつなぐことが可能となる。これに対し、日本人の思想にはこうした絶対者の存在がなく、「隣人」を越えた他者への見通しが利かない。だから日本人の「おのれ」は不十分なのである。

解答

問1 □ 問2 ヌ 問3 ル

問4 ツ 問5 ム 問6 マ

問7 ケ

問8 「おのれを空しうす」るために前提として必要な個人主義とは、相対的な現実世界の上に絶対者を設定し、個々人がその絶対者

を媒介に結びつくことによって成立するものである。ところが日本ではそうした絶対者の存在は設定されず、他人との距離を恐れるゆえの自他を未分状態に保とうとする自衛本能だけが続いてきたから。〔148字・解答例〕

出典：井上忠司『世間体』の構造』／オリジナル問題

文章略解

日本人は世間の眼にあわせて自己規制を働かせ、意志決定をおこなってきた。しかし、西洋の近代的自我の思想にふれて以来、わが国では強い自我が育たないままに世間の眼を故意に拒否しようとする風潮が強くなった。その結果、日本人は他者との人間関係を結ばないことで見られないことによる自由を拡大したが、その一方で、その自由を自発的に使いこなすことも出来ず、希薄な人間関係ゆえの孤独にいらだつという状況に陥っている。

解答

問1 AⅡハ BⅡニ 問2 ホ 問3 イ

問4 ロ 問5 イ 問6 ハ

解説

問1 A直前に「世間の眼」から見られたときの自分をはじむ」とある。見られなければ恥じる必要がないわけで、この恥ずかしさにもとづく倫理感は、多分に状況に左右されるものである。また、次の段落には「世間」の人たちの「まなざし」にとらわれているという状況の過程のなかで、つよい自己規制をはたらかせてきた」とある。わが国の人々の倫理観は、きわめてハ「状況的」であつたわけである。

B世間の眼と自分とのズレを微調整して、「世間」の基準から自分だけが逸脱」しないように生きるとは、ニ「世間並」に生きるということである。

問2 西洋の「唯一絶対神」はキリストであり、キリスト教徒はホ「罪」(原罪)の意識をもとに、自己の倫理感を形成するのである。

問3 Cは、その後に出てくる「まず自分の意志をきめて、それからまわりの人たちにその結果を説得してゆこうとする生き方」と正反対な方向性を持つことを押さえる。すなわち、〈世間の眼と自分とのズレを微調整して世間並に生きる〉ことだから、イがふさわしいということになる。

問4 強い自我(自己の主体性・自律性・創造性)があれば〈世間の眼〉などはまったく気にかける必要はないが、それが無いのに〈世間の眼〉を拒否するかどうかという陥穽(落とし穴)にはまるか。〈世間の眼〉を拒否するのは、「強い自我」によってではないから、結局は〈世間の眼〉の届かないところで行動して偽りの解放感に浸るしかなくなるのである。よって口となろう。

問5 「自由の代価だけを払わされて……いらだちを覚えざるをえない」とある。この「代価」は、「いらだち」とつながるものである。都市への集中は、かつての「世間」の様相を変え、〈世間の眼〉という、外からの規制を希薄にした。となれば、そこに住む者は、大いなる自由を満喫してもよいはずである。ところが、「官僚制やマス・メディアの発達」は、多くの人々の生活や思考の均一化・画一化をもたらした。都市は同じような価値観を持つ単体の、総集の場となったのである。かつての「世間」は、そのあり方は是非は別として、強い連帯感をその構成員に与えていた。「自発性と創造力」を欠いたまま連帯の枠の外に放置されれば、その人は、自己の存在感の希薄さに苛まれるだろう。それがこの「自由の代価」なのである。

問6 前問と関わる。疎外感・孤立感に苛まれて「いらだちを覚え」る「現況」は、結局、ハ「生きた人間と、生きた人間関係を結んで自己存在の確認ができないところに、根源的な原因があるのである。前段落に「他者との人間関係をむすぶことを少なくして……」とあるのを踏まえるとよい。



Z-KAI

会員番号	
------	--

氏名	
----	--